科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号: 1 1 3 0 2 研究種目: 基盤研究(C) 研究期間: 2012~2014

課題番号: 24520697

研究課題名(和文)外国語活動における最適教授法の開発

研究課題名(英文)Optimal pedagogy for implementing foreign language activities

研究代表者

板垣 信哉(ITAGAKI, Nobuya)

宮城教育大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号:80193407

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、小学校外国語活動の目標であるコミュニケーション能力の素地の育成のためにはどのような指導法を行うことが効果的なのかを明らかにすることである。本研究の結果、まず、聞いたり,読んだりする中で,インプットの「質」と「量」の保証に細心の注意を払う必要があることが分かった。さらに、公立の小学校の5,6年生のクラスに対して、聞くことを中心としたインブット実践、ICTを活用して聞くことを中心としたインプット実践、やり取り(アウトプット)を中心とした実践を1年間継続し、児童の「振り返り」を分析した。その結果、児童の1年間の振り返り内容の様相を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文): The purpose of this research is to investigate an optimal pedagogy for implementing foreign language activities at public primary schools in Japan. First, this research takes a narrative approach to synthesizing existing empirical research on input-based and output-based tasks in second language acquisition research. The results show that input-based and output-based pedagogical approaches are equally effective for promoting second language learning. Second, based on the narrative review, we created various input-based and output-based tasks and implemented them at three public elementary schools in Japan. The pupils in these schools were asked to reflect, in writing, on what they had learned and noticed during foreign language activities over a one-year span. The analyses of pupils reflections shed some insights on how the pupils noticed linguistic issues (e.g., pronunciation, vocabulary) and how they felt about the input-based and output- based activities.

研究分野: 英語教育学

キーワード: 外国語活動 小学校英語教育 第二言語習得 インプット アウトプット 振り返り

1.研究開始当初の背景

2011 年 4 月から四半世紀の実践の蓄積を基に小学校外国語活動がスタートした。その目標であるコミュニケーション能力の素地の育成のためには、どのような指導法を行うとが効果的なのであろうか。これまでのために活用したり、教室英語を積らに活用したり、リスニングだけではなのに活用したり、リスニングだけではなのに活用に動かす全身反応教授法などのインプ言の教授法や、「みんなで声プット中心の教授法が、「みんなで声ブット中心の教授法が小学生の英語能力を伸いような指導法が小学生の英語能力を伸いる。といるであった。

2.研究の目的

(1) 文献研究

本研究の第一の目的は、児童の第二言語(外国語)指導に関する国内外の文献を精査することよって、理論と研究に基づいた、小学校英語教育における指導法について提案することである。

(2) 実践研究

本研究の第二の目的は、(1)に基づき、日本の公立小学校における高学年の初級児童を対象とし、どのような指導がコミュニケーション能力の素地をどのように伸長させるのかを検証することを通して、外国語活動に関する具体的な指導法を小学校教師に提供することを目的とした。

3.研究の方法

(1) 文献研究

まず、3つのデータベース(ERIC, LLBA, ProQuest) 主要な国際雑誌(例: Language Learning、TESOL Quarterly、Studies in Second Language Acquisition、Applied Linguistics、Language Teaching Research、The Modern Language Journal)の中から、児童に関する第二言語指導に関する研究論文を収集した。

次いで、外国語活動との関連から目標言語が英語であること,日本と同様の外国語環境で研究が行われていること等を基準に論文を選択した。そして、選択された論文を精査した。

(2) 実践研究

宮城県内の公立小学校複数を対象とした。 宮城県内の小学校 2 校(A小学校とB小学校 とする)の児童を対象とした。A小学校は5 年生33名(男子17名、女子16名)と6年 34名(男子18名、女子16名)。B小学校は6年生35名(男子17名、女子18名)。B小学校は6年生35名(男子17名、女子18名)であった。なお分析にあたってはA小学校5年生と6年生のデータを統合したものを用いた。文献研究に基づき、それぞれの学校の5,6年生のクラスに対して、聞くことを中心とした インプット実践、ICT を活用して聞くことを中心としたインプット実践、やり取り(アウトプット)を中心とした実践を1年間継続した。毎回の授業の最後に、「振り返り」をさせた。児童の振りかえりを分析することで、児童の指導法への情意的な面(意欲・関心・態度)や言語学習の面(語彙や文法への気づき)を探ろうと試みた。振り返りのデータについて計量テキスト分析(テキストマイニング)を実施した。

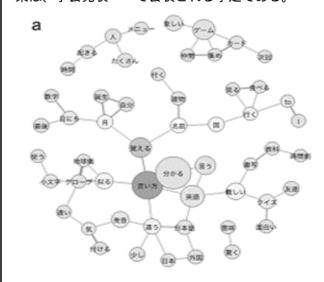
4. 研究成果

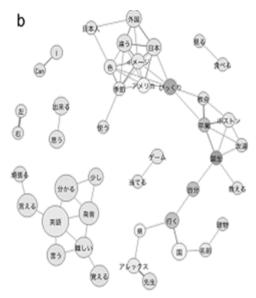
(1) 文献研究

文献研究を通して、聞くことを中心したイ ンプット活動と話すことを中心としたアウ トプット活動は言語習得に効果的であるも のの, どちらがより有効な言語活動なのかは, 結論づけることはできなかった。文献研究の 結果は、「すぐに声に出して言わせよう」と するようなアウトプット型活動だけではな く,聞いたり,読んだりする中で,インプッ トの「質」と「量」の保証に細心の注意を払 う必要を示している。本研究の成果は、現在 の実践だけではなく、今後教科となる小学校 英語教育の指導法に重要な示唆を与えてく れるはずである。文献研究の成果は、雑誌論 学会発表 、図書、 文 その他 で公表されている。

(2) 実践研究

小学校 2 校 (A、B とする)の5、6年生ごとに、児童の記述データについての単純集計を行った。A小学校では、総抽出語数が24,155 語、異なり語数が1,538 語、文数が2,857 文であった。一方、B小学校では、総抽出語数が12,408 語、異なり語数が858 語、文数が1,519 文であった。A小学校とB小学校それぞれの抽出語について共起ネットワーク分析を行った(以下の図a,bを参照)。その結果、児童の1年間の振り返り内容の様相を明らかにすることができた。実践研究の成果は、学会発表で公表される予定である。





5 . 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

板垣 信哉 (2015)「小学校外国語活動の目標に関する考察」『宮城教育大学外国語研究論集』8号、55-63.(査読無) <u>鈴木 渉</u>(2015)「第二言語習得論に基づく小学校英語教育の教授法」『宮城教育大学外国語研究論集』8号、43-54.(査読無)

根本 アリソン (2015)「Categorizing

the proposed syllabus changes for English Education in Japanese primary school against standard models of syllabus design」『宮城教育大 学外国語研究論集』8号、19-23.(査読無) 板垣 信哉・鈴木 渉(2015)「小学校 英語活動と中学校英語教育の接続 - 言語 知識と記憶理論の観点から - 」『JES Journal』15号、68-62.(査読有) 鈴木 渉・<u>リース エイドリアン</u>・<u>根本</u> <u>アリソン・板垣 信哉 (2013) 「Hi,</u> friends! を活用した小学校外国語活動 1 ~10] - コミュニケーションしようとす る意欲—」『英語教育 4~12 月号』62 号 1 ~10 巻,48-50 大修館書店(査読無) 栄利 滋人・Adrian Leis・鈴木 渉 (2012 JiPad2 を活用した外国語活動の

[学会発表](計5件)

無)

<u>鈴木 渉・板垣 信哉</u>・今野 ゆき・齋藤 友靖 (2015)「小中接続の課題と工夫・言語能力の熟達化理論に基づいて・」(授業研究フォーラム)第42回全国英語教育学会熊本研究大会 熊本学園大学(熊本県熊本市) 2015年8月22日

実践報告」。宮城教育大学附属国際理解教

育研究センター年報』7号 24-40.(査読

板垣 信哉・鈴木 渉・リース エイド リアン・栄利 滋人・千葉 和江(2015) 「英語活動における『振り返り』の実証 的研究 - 第二言語習得研究の観点に基づ いて - 」(課題研究発表)第15回小学校 英語教育学会広島大会 広島大学(広島 県東広島市) 2015年7月25日 板垣 信哉・鈴木 渉(2013)「小学校 英語活動と中学校英語教育の接続 - 言語 知識と記憶理論の観点から-- 第 13 回小 学校英語教育学会沖縄大会 琉球大学 (沖縄県那覇市) 2013年7月14日 鈴木 渉・板垣 信哉 (2012)「インプ ット型活動とアウトプット型活動が文法 学習と内容理解に及ぼす効果」第38回全 国英語教育学会愛知大会 愛知学院大学 (愛知県日進市) 2012 年8月4日 鈴木 渉・板垣 信哉(2012)「第二言 語習得研究からみた小学校英語教育の指 導法」第12回小学校英語教育学会千葉大 会 千葉大学 (千葉県千葉市) 2012 年 7 月16日

[図書](計1件)

<u>鈴木</u> 渉・エイドリアン リース(2014) 「教員の学習機会と教員養成」全国英語 教育学会第 40 回研究大会記念特別誌編 集委員会(編)『英語教育学の今 - 理論と 実践の統合 - 』(pp. 24-27)全国英語教 育学会

[その他](3件)

板垣 信哉 (監修)(2013) 『英語表現に 慣れ親しむための「聞く活動」を中心と した授業』(DVD 全 1 巻) ジャパンライ ム株式会社

<u>板垣 信哉 (監修)(2013)『子どもたち</u>中心の授業作り~アクティブな体と心を育てる活動例~』(DVD 全 2 巻) ジャパンライム株式会社

板垣 信哉 (監修)(2013)『音声インプット中心の小学校英語活動の実践~ICT活用のアクティビティ紹介~』(DVD 全1巻) ジャパンライム株式会社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

板垣 信哉 (ITAGKI Nobuya) 宮城教育大学・教職大学院・教授 研究者番号:80193407

(2) 研究分担者

宮曽根 美香 (MIYASONE Mika) 東北工業大学・経営コミュニケーション 学科・教授

研究者番号: 90254812

鈴木 渉 (SUZUKI Wataru) 宮城教育大学・教育学部・准教授 研究者番号: 60549640

リース エイドリアン (LIES Adrian) 宮城教育大学・教育学部・准教授 研究者番号:9059068

根本 アリソン (NEMOTO Alison) 宮城教育大学・教育学部・特任准教授 研究者番号: 40634366